I 研究主題

古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり ~ 古典における言語活動の工夫を通して ~

Ⅱ 主題設定の理由

現代社会は、あらゆる面で国際化が進み、それに伴い『国際競争』や『国際共存・協力』という考え方が生まれてきた。そのため、「国際競争を生き抜くために必要な知識・理解や思考力、判断力、表現力」「英語等の語学力」等とともに、共存の大切さを理解して他国を尊重するうえで必要な「国家や郷土を愛する心」についても、重視されるようになってきた。このような社会の現状を反映させ、教育基本法や中央教育審議会の答申を受け、学習指導要領が改訂された。この中で、「言語活動の充実」「理数教育の充実」「外国語教育の充実」など、教科における指導の充実が図られるとともに、「伝統や文化に関する教育の充実」や「道徳教育の充実」などについても推進されることになった。特に国語科においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、古典の学習内容が改善されるとともに、読書指導の中にも、古典に関する作品を取り上げるように示された。

「国家や郷土を愛する」ために、古典が重視されるのはなぜか。それは、「国家や郷土を愛する」ためには、そこに住んでいる(住んでいた)人々について知り、その魅力を感じる必要があるからである。古人の思いが書かれた古典の作品を読むことは、古人について知るための有効な手段といえる。したがって、古典を読もうという意識を高め、古典から何かを感じ取ろうとする姿勢は、「国家や郷土を愛する」うえで大切なことなのである。

これらのことを踏まえ、研究主題を設定するにあたり、研究実践校で実態把握を行ったところ、必ずしも、古典に対して親しみ、何かを感じ取ろうとする姿勢が育っているとはいえなかった。時代の違いから、古典の世界に対してへだたりがあり、古典の世界を身近な存在として感じることができず、「将来大人になったら、古典を読もうと思っていない」という生徒が74%いた。また、古典を学ぶ意味については、「なぜ古典を学ぶのかよくわからない」や「昔の言葉を覚えるため」といった、学ぶ意味を十分に理解できていない生徒が、約半数いた。さらに、古典に対して、時代を超えた共通性を感じるかどうかについては、「古典の内容に『なるほど』と共感することがない」と答えた生徒が57%いた。

そこで、これらの実態を考慮し、生涯にわたって自ら古典と親しみ、言語文化への関心を 広げたり深めたりすることができるよう、「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業 づくり」を行うことにした。

研究を進めるにあたっては、授業の中に「気づく」「共感する」「生かす」という3つの段階を設定し、言語活動を用いて、考えを整理・練り上げ・表現させようと考えた。まず、「気づく」段階として、古典の魅力に気づかせ、なぜ古典を学ぶのかという必要性を感じさせる。次に、「共感する」段階として、現代にも通じる時代を超えた共通性を感じさせ、共感的な視点を持たせる。そして、「生かす」段階として、古典を通して学んだことを自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげさせる。このような手立てを行うことにより、古典の魅力に気づき、共感的な視点を持って受け入れ、自分の価値観や考え方に生かそうとする生徒が育つと考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究目標

生涯にわたって、自ら古典に親しみ、言語文化への関心を広げたり深めたりする態度を育てるために、「気づく」「共感する」「生かす」ことのできる生徒を育成する古典学習のあり方について、理論研究及び実践による検証を行う。

IV 研究仮説

- 1 古典の作品への理解を深め、自分の考えを整理する言語活動に取り組むことで、生徒が作品の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解することができるであろう。
- 2 理解した古典の内容と現代の作品を比べ、自分の考えを練り上げる言語活動に取り組むことで、生徒が時代を超えて、古典の作品に共感することができるであろう。
- 3 「気づく」「共感する」をもとに、自分の考えを表現する言語活動に取り組むことで、 生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげようとするであろう。

宫崎県教育基本方針

たくましいからだ

豊かな心 すぐれた知性

基礎体力の向上

基本的な生活習慣やマナーエチケットの育成

基礎学力の向上

関 係 習指導 法規 要領

山田中学校の教育目標

豊かな心をもち意欲的に学習に取り組む生徒の育成

研究主題

古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり

~ 古典における言語活動の工夫を通して ~

生徒の実態 職 員 保護者の 願

めざす生徒像

古典の魅力に気づき、共感的に受け入れ、自分の価値観や考え方に 生かそうとする生徒

研究仮説 仮説 3 仮説 1 仮説 2 古典の作品への理解を 理解した古典の内容と 「気づく」「共感する」 深め、自分の考えを整理 現代の作品を比べ、自分 をもとに、自分の考えを の考えを練り上げる言語 する言語活動に取り組む 表現する言語活動に取り ことで、生徒が作品の魅 組むことで、生徒が古典 活動に取り組むことで、 力に気づき、古典を学ぶ 生徒が時代を超えて、古 を自分の価値観や考え方 必要性を理解することが 典の作品に共感すること に生かし、生活につなげ ができるであろう。 できるであろう。 ようとするであろう。 研究内容 「生かす」 「気づく」 「共感する」 価値観や考え方に生かす 古典の魅力に気づく 時代を超えて共感する 自分の考えを整理 自分の考えを練り 自分の考えを表現 する言語活動 上げる言語活動 する言語活動 理論研究 「めざす生徒像」についての考え方) 言語活動のポイント 「気づく」「共感する」「生かす」 評価の基本的な考え方 についての考え方

VI 研究内容

- 1 研究の基本的な考え方
- (1)「めざす生徒像」についての考え方
 - ① 古典の作品にふれる必要性

現代の国際化の流れの中で、教育基本法第2条では「伝統や文化を尊重し、国家や郷土を愛する」ことが、教育の目標として示された。この中の、「国家や郷土を愛する」とは、生徒たちのどのような姿を目指し、そのためにどのような指導が求められるのだろうか。

さだまさし氏は、著書『本気で言いたいことがある』の中で、「国の魅力とは、実はその国に住む〈人の魅力〉ではないか」と述べている。つまり、「国家や郷土を愛する」には、そこに住む(住んでいた)人々について知り、その魅力を感じる必要がある。その方法として、古人の思いが書かれた古典の作品を読むことは有効であり、生涯にわたって古典に親しみ、読書などを通して、関心を広げたり深めたりすることは「国家や郷土を愛する」うえでも大切なことだと考える。

② 生徒の実態

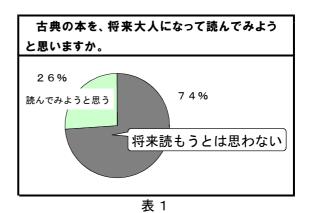
生徒は、古典に対して、どの程度関心 があるのだろうか。

研究実践校の2年生を対象に、次のようなアンケートを行った。「古典を、将来大人になって読んでみようと思いますか」という問いに対して、古典に関心がなく、将来読んでみようとは思わないという生徒が74%いた。〈表1〉

その原因として、次の2点が考えられる。1つ目は、歴史的仮名遣いなどの、古語そのものに対して抵抗感があることである。そして2つ目は、時代の違いから、古典の世界に対してへだたりがあるため、共感することができないことである。〈表2〉 そのため、古典のおもしろさがわからないのである。

③ めざす生徒像

本研究では、生徒の古語に対する抵抗 感にも配慮しつつ、古典の世界へのへだ たりを減らす取組を中心に授業を組み立 てることで、生徒の古典への興味・関心 を高められるのではないか、と考えた。



古典の内容に「なるほど」と共感することがありますか。

43%

#感することがある

共感することがない

表 2

古典の世界へのへだたりを減らすために、生徒に必要なのが「古典の魅力に気づき、なぜ古典を学ぶのか、という必要性を感じる」「古典を特別なものとして見るのではなく、時代を超えた共通性があることを感じ、共感する」という2点である。そして、共感を深め、生涯にわたって自ら古典に親しむことを考えれば、「古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげる」ということも必要になる。

そこで、具体的な授業の工夫・改善を行ううえで、めざす生徒像を、次のように設定した。

めざす生徒像

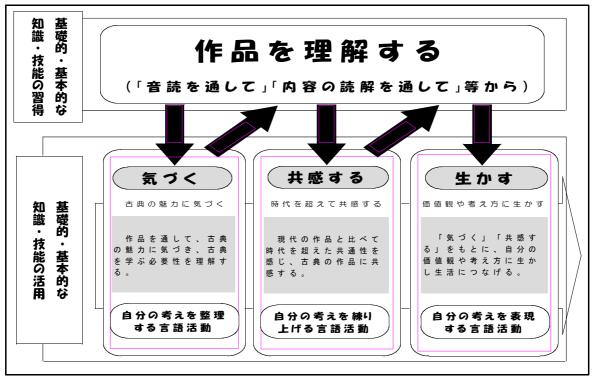
「古典の魅力に気づき、共感的に受け入れ、自分の価値観や 考え方に生かそうとする生徒」

(2)「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」についての考え方

① 学習過程について

生徒をめざす方向へ導くために、「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」 として、「気づく」「共感する」「生かす」という3つの段階を設定し、学習過程の工 夫・改善を行った。

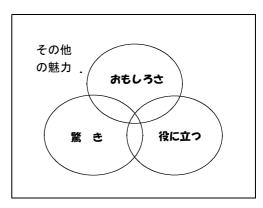
学習過程については、次の通りである。



学習過程について

② 「気づく」段階について

「古人の思いを受けとめ」るために大切なのが、生徒の古典を学ぶ意識である。古人の思いを時代を超えて共感するには、生徒自身が古典をなぜ学ぶ必要があるのかを理解してわだたりを感じている生徒にとって、「なぜ古典を学ぶのか」と問われても答えにくい。そこで今回の研究では、「なぜ古典を学ぶのか」を考える前に古典の魅力について気づかせることにした。また、古典の魅力については、教科書で取り扱う題材の内容を考慮し、「おもしろさ」「驚き」「役に立つ」という3点を中心に考えさせた。



古典の魅力のイメージ図

③ 「共感する」段階について

出版された言語が違っていても、世界中で愛読されている作品が数多くある。このように言語の違いを超えて、作品が読まれ続けているのはなぜか、と考えたとき、それは自分の感性とその作品との間に「共感する」気持ちが働くからではないかと推論した。「共感する」気持ちが引き合う力となり、さらに読む意欲が増すのではないか。

古典についても、へだたりがあるという点では海外の書物の場合と同じであり、現代において、日常生活の中で古典にふれることは、生活様式の違い等から考えても難しい。したがって授業を通して、古典と現代の文章を比較し、時代を超えた共通性を探す場を設定して、共感的な視点を持たせることにした。

④ 「生かす」段階について

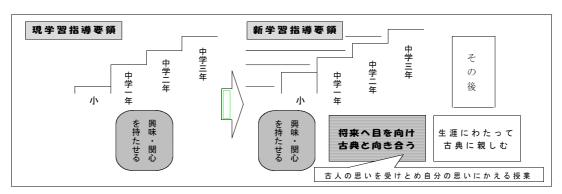
古典のような言語文化の場合、読んでみて「へぇ、そうなのか」「昔の人は大したものだ」などの感想で終わったのでは、別世界のことという認識しかなく、生徒の生活にはつながらない。あくまでもその場かぎりのものになり、「古典は学校で学ぶもの」という意識のままである。したがって、生涯にわたって古典に親しむようにするためには、生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活とつなげて考えるようにすることが大切である。つまり、古典に対して共感したことを、自分の言葉で理解させ、自分の思いにかえさせる必要がある。

(3) 系統性に関する基本的な考え方

までと比べて早まることを意味している。

① 小学校における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」との系統性 今回の学習指導要領の改訂により、小学校の第1学年から「伝統的な言語文化と国 語の特質に関する事項」の学習が始まる。このことは、古典に慣れ親しむ段階が、今

この点を考慮すると、中学校において、今までのような古典に慣れ親しませることを中心にした学習から、将来に目を向け、今後どう古典と向き合っていくのかを意識させるような学習へと、変えていく必要があると思う。それが本研究でいう「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」である。



小・中学校の系統性

② 中学校における学年の系統性

「気づく」「共感する」「生かす」については、単学年のみで実施するのではなく、3年間を見通して、系統的に実施していく必要がある。そこで『学習指導要領』の指導内容と生徒の実態を考慮し、次のように活動内容を設定した。

	気	づく	共感する	生 か す
		古典の魅力として	作品の内容につい	「気づく」「共感す
_	【プレ気づく】	「おもしろさ」「驚き」	て理解し、現代にも	る」をもとに、『わた
年	身の回りにある	があることに気づく。	同じような考え方が	しの枕草子』を創作
	本の魅力を整理す		あることを知る。	する。
	3.		枕 草 子	
		古典の魅力として	作品の内容や作者	「気づく」「共感す
=	本の魅力の例	「おもしろさ」「驚き」	の思いについて理解	る」をもとに、『兼好
年	4.41 71.	に加えて「役立つ」	し、現代にも同じよ	法師への手紙』を創
	 おもしろい 楽しい 	があることに気づく。	うな考え方があるこ	作する。
	② 呆しい		とを知る。	
	4 驚きがある		徒 然 草	
	5 わかりやすい	古典の魅力として	作品の内容や歴史	「気づく」「共感す
Ξ	⑥ 役に立つ	3 つ の 視 点 を 再 確 認	的背景、古人の知恵	る」をもとに、『奥の
年	⑦ 共感できる	する。	や感性を理解し、現	細道新聞』を創作す
	8 作家が好き		代にも同じような考	る。
	9 表紙の絵		え方があることを知	
	⑩ 題名がいい		る。	
			奥の細道	

題材と活動内容に関する系統

(4) 古典の学習における言語活動の位置づけ

「気づく」「共感する」「生かす」という段階をふまえて学習を進めるには、音読や グループ発表といった従来の授業内容だけでは不十分であり、学習の効果を高めるため に、言語活動を工夫し、授業に取り入れることにした。

そこで、言語活動のポイントを、次のようにまとめた。

○ 言語活動とは

言語活動は、授業における指導目標の実現のために、児童生徒のそれまでの学習歴や言語能力の実態を踏まえ、意図的・計画的に設定する学習活動。

※ 言語活動が単に活発な話合いや発表を位置付けるだけのものではなく 各教科等のねらいの実現に寄与するものとなる必要がある。

「各教科等における言語活動の充実 一移行期、国語科の役割一」 (田中孝一2009.5)

このような言語活動の趣旨を考え、本研究では「気づく」「共感する」「生かす」の各段階で言語活動を充実させるために、指導目標と言語活動の目的を次のように設定した。

	各段階における指導目標	言語活動の目的
	作品を通して、古典の魅力に気づき、	作品の魅力に気づくため
「気づく」	古典を学ぶ必要性を理解する。	に、印象に残ったところを
		整理すること。
	現代の作品と比べて、時代を超えた	理解した古典の内容をも
「共感する」	共通性を感じ、古典の作品に共感する。	とに、現代の作品と比べ、
		共通点をまとめること。
	「気づく」「共感する」をもとに、	「気づく」「共感する」
「生かす」	自分の価値観や考え方に生かし、生活	をもとに、自分の価値観や
	につなげる。	考え方に生かして書くこと。

この言語活動の目的をもとに、目的の実現に必要な手立てと具体的な活動内容を、次のように設定した。

	「気づく」	「共感する」	「生かす」
実現に 必要な 手立て	自分の考えを 整 理 す る ための手立て	自分の考えを 練 	自分の考えを 表 現 す る ための手立て
具体的 <i>t</i> 活動内容		自分の考えを 練り上げる言語活動 討議の技法を 用いた言語活動	自分の考えを 表現する言語活動 作品づくりを 用いた言語活動
検証授業での 手立て	(KJ法)	バズセッション	手紙づくり

- 2 単元「徒然草」における授業実践(仮説の実践検証)
- (1) 学習指導計画

1 単元名 古典を楽しもう (徒然草)

- 2 目標
- O 古典を学ぶ意味に気づき、楽しみながら、意欲的に古典とかかわろうとする。 【関·意·劇
- 〇 古人のものの見方や考え方をとらえ、時代を超えた共通性を感じて共感的な視点をもつ。 【G織的な語文化】
- 3 作品(徒然草カサニ段)について

【 口語訳 】

ある人が、弓を射ることを習うときに、二本の矢を手にして的に向かった。師匠の言うには、「初心者は、 二本の矢を持ってはならない。後の矢をあてにして、初めの矢を射るときに 油断が生じるものだ。毎回 ただ、命中するかどうか迷わず、この一本の矢で必ず当てようと思え。」と言う。

たった二本の矢なのに、師匠の前で、一本をおろそかにしようと思うだろうか。 油断する心は、自分自身では気づかなくても、師匠はこれを見通す。この教訓は、すべてのことに通ずるであろう。

4 指導計画

	時間	学習内容及び学習活動	研究に関わる生徒の姿	必要な言語活動
<u>**</u>	1	音読や口語訳を行い、作品		
第 1 次	2	を理解する。 身の回りにある本の魅力を	【プレ気づく】	
		整理する。	10000	
第 2 次	3	1 徒然 (九十二段) を ・ は は で (九十二段) を ・ は な で は で で で で で で す に の の き も め ん か で 、 る で の き 古 の き さ と 本 魅 と 本 魅 と 本 魅 と 本 魅 に か で い を で が で い る 要 性 で い る で い る 要 性 で い る 要 性 で い る 要 性 で い き が が に の カ に か ま の カ に か ま が で い る 要 性 で い き が で い る 要 性 で い き が で い る 要 性 で い き が で い る 要 性 で い る 要 性 で い る 要 性 で い る 要 性 で い き が か か か に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の カ に す る の か に す る の な れ か に す る の か に す な な れ か に す な な な な な な な な な な な な な な な な な な	作品から、古典の魅力として「おもしろさ」「驚き」に加えて「役立つ」があることに気づき、古典を学ぶ必要性を理解する。	自分の考えを整理する言語活動 KJ法を 用いた言語活動
第 3 次	4	9 の 1 に 1 に 1 に 2 に 2 に 2 に 3 の 3 の 4 に 5 と 5 との 5 との 6 を 6 を 6 を 6 を 6 を 6 を 6 を 6 を	作品の内容や作者の思いについ、現代のの事にののは、現代の手記)とはいることで、現代にも同いままで、方があることを知る。	
第 4 次	5	1 徒然草(九十二段)を音読し、 既習の内容を復習する。 2 学習したことをもとに、 兼好法師あての手紙を書く。 3 できあがった文章を見直 し、推敲する。 4 手紙を完成させて発表し	「気づく」「共感する」を もとに、自分の価値観や考 え方に生かし、「兼好法師へ の手紙」を作成することで、 生活につなげる。	
		合う。		

(2)「気づく」段階の学習活動について

① 学習活動の様子

徒然草のホキニ段では、主題の他にも、印象に残る内容を多数見つけることができる。 しかし、多くの内容を見つけるだけで整理しなければ、十分に理解することはできな い。そこで、KJ法を用いて自分たちの意見を整理させた。









個人の意見を書く 📄 グループで話し合う 📄 見出しをつける 🔜 全体で発表してまとめる

生徒は、意欲的にグループ活動に取り組んだ。作品の主題は「今、この瞬間に集中 することの大切さ」「気付かぬうちに油断する気持ちは生まれる」の2点を考えていた が、「師匠のすごさ」「師匠の厳しさ」等、弓の師匠に対しての意見も多かった。

② 仮説1の検証

ア 言語活動の効果について

「気づく」段階の事後アンケートから	
肯定的な意見の生徒(%)	
しっかり考えることができましたか。	88%
「付箋紙」を使うことで考えを整理できましたか。	91%

表 3

生徒は、KJ法をもとに十分 に考え、整理することができた と答えている。特に「付箋紙」 が、考えを整理するのに役立っ たと答えた生徒は 91% であっ た。〈表3〉 ただ、K J 法に対

して「分け方がわからなかった」等の感想も見られた。日頃からKJ法に慣れておくと、 さらに効果があったのではないか。

イ 意識の変容について

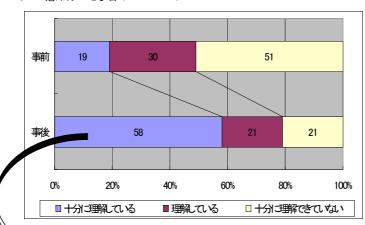


表 4 「なぜ古典を学習すると思いますか」

古典の魅力に気づき、古典を 学ぶ必要性を理解できたかにつ いては、当初「わからない」「教 科書に出てくるから」と答えた り、「昔の言葉を覚えるため」 といった古語そのものの学習だ と答えたりするような、いわゆ る古典を学ぶ必要性を理解でき ていない生徒が51%いた。 今回の授業で、それが 21 %に まで減り、逆に理解できている 生徒は、79%に増えた。〈表4〉

「なぜ古典を学ぶのか」に対する生徒の答え(一部)

「昔の人がやってきたことを、部活や勉強などに生かすことができるから」 「自分自身で忘れかけていたことや、現在の行動を振り返るいいチャンスができるから」 「今の自分にも、未来の自分にも役に立つことがあるから」

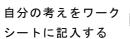
(3)「共感する」段階の学習活動について

① 学習活動の様子

「共感する」では、徒然草の九二段で学んだことをもとに、北島康介の手記と比較させ、どの点が手記の内容と共通しているのかを考えさせた。個人で考えた後、それぞれの意見を集めてまとめるための、収束型のバズセッションを行った。

また、授業の終末に、事例を1つだけで終わらせないようにするため、2つ目の事例を、生徒にとって親しみのある漫画から探し、提示した。



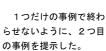




考えを収束するため に練り上げる



グループごとに発表し 全体でまとめる



授業の中では、生徒に話し合いの方法を説明する際、「初めから1人の生徒の意見に決めるのではなく、いろいろな意見のよいところを合わせて、一番いい意見にまとめよう」と指示したのだが、中には下の表のように、全員の意見を吟味し、その内容に合う別の言葉を使う等、考えを収束させるために工夫するグループもあった。

徒然草との共通点

- レースでは常にすべての力を出し切っているところ
- 一つ一つのことに気を抜かないところ
- 〇 一つのことに集中するところ
- 何事にも集中するところ
- 〇 先のことを考えず常にレースで全力を出すところ



完全燃焼

② 仮説2の検証

ア 言語活動の効果について

「共感する」段階の事後アンケートから		
肯定的な意見の生徒(%)		
グループでの話し合い活動は役に立ったと思いますか。	85%	
現在にも古典との共通点があると思いますか。	88%	

表 5

話し合い活動が、意見を練り上げ、まとめるのに役立ったと答えた生徒は85%だった。さらに、現代にも古典との共通点を感じることができた生徒も、88%いた。このような結果か

ら、バズセッションの効果は十分にあったと考えられる。〈表 5 〉授業後の感想の中には、「話し合いの中で、違う意見が出ておもしろかった」というものもあった。

イ 意識の変容について

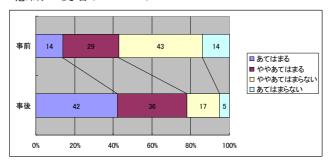


表 6 「作品の内容に『なるほど』と共感することがありますか」

古典の作品に対して共感できない、という生徒が 57%いたが、今回の「共感する」授業を通して、22%に減少し、78%の生徒が、「なるほど」と思えるようになった。 〈表 6〉「古典には、奥深い意味があることがわかった」という生徒もいた。

(4)「生かす」段階の学習活動について

① 学習活動の様子

できるだけ書くことに対する興味を高め、意欲的に参加させるために、意見作文ではなく、兼好法師に手紙を書くという設定で授業を行った。

自分のことを振り返らせて、手紙を書かせたときに、部活と結びつけて考える生徒が多かった。書き上げた後は、各自で推敲し、グループに分かれて見せ合った。

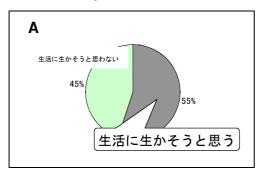
兼好法師に手紙を書く様子

② 仮説3の検証

ア 言語活動の効果について

今回、中学生は電子メールやブログに親しむ者も多いことから、手紙文として作品を作らせたが、今回の言語活動を通して「古典の内容を自分の生活に生かそうと思う」という生徒は55%にとどまった。〈表7A〉細かく分析すると、手紙を書くことが好きだ、という生徒の86%が「生かそうと思う」と答えたのに対して、「手紙を書くことが好きではない、という生徒の場合は、41%であった。〈表7B〉

手紙を書くことの好き嫌いが、結果に影響を与えており、今後検討すべき課題だといえる。



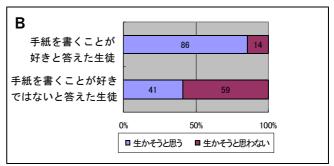


表7 「手紙作りを通して自分の生活に生かそうと思いましたか」

イ 意識の変容について

下のような手紙を書いた生徒もおり、全体的に意識が変わってきたと思う。

私は、中学校で吹奏楽部に所属していますが、毎日ある練習の中で「どうせまた明日も練習あるから今日はだるいし軽く吹いておけばいい」と思うときがあります。そして、いつも本番が近くなってあせることが多くありました。兼好法師さんの「徒然草」を勉強して「1つに集中することの大切さ」を学び、こんなことではいけないのだ、と思わされました。古典はただ国語の授業で歴史的仮名遣いなどを学ぶだけではなく古典に書かれている考え方を吸収することによって、日々の生活に役立つということがわかりました。

VII 成果と課題

1 成果

- 生徒に、古典の魅力や学ぶ必要性について考えさせることができた。
- 古典に対して時代を超えた共通性を感じさせることができた。
- 古典の内容を、自分の価値観や考え方に生かそうとする姿勢を育てることができた。

2 課題

- 日頃から言語活動の目的を明確にして、慣れさせておく必要がある。
- 指導と評価の一体化をめざし、言語活動中の支援を工夫していく必要がある。
- 一時的な取組ではなく、小学校から系統的・計画的に取り組んでいく必要がある。

○ 参考文献 ・ 中学校学習指導要領(平成20年3月告示) ・ 教育科学国語教育(20088月号)(200812月号)(20095月号) ・ 初等教育資料(平成21年8月) ・ 中等教育資料(平成20年6月) ・ 本気で言いたいことがある さだまさし著 (新潮新書)